

あ め つ ち

富 田 惣 七*

あまりあたりまえの事は、余ほどのことがないと、話すのにかなりの勇気がいります。分りきってることが、まるで分ってない、というのが今の世の中ですから、大変ばかばかしいことですが、改まって言いますなら、——人間というものは、地球上に生息している生物であります。ただそれだけのものであります。なにも特別なものではありません。

地球の上には大変な数の、たくさんの種類の生物がありますが、人間はその中の一つである、というだけのものであります。

★ ★ ★

ところがその人間が、自分勝手に、自分らだけが何か非常に格別なものだと思いこんで、頼まれもしないのに、いろいろとその理由を數えあげたりするのであります。

その数えあげる事柄の中には、大抵——文化だの、学問だの、科学だの、技術だの、近頃ならハイテクだの男女産み分けだの、というようなものがあります。そして当然——他の生物はとても、ということで小鼻をひくひくさせているのであります。

★ ★ ★

しかし哀れにも、そうして数えあげているときの人間の頭の中には——本当は自分たちが、すべての生物の中で一番馬鹿げたことをやっているのだ、という意識はまるでありません。尤も無いからそんなものを数えあげたりするのですが。

人間が『進歩した』として自分で数えあげるものとは、とても比較にならない、とんでもない事をやってますから、そんなことは帳消しどころか大変な借り越しになってしましました。

★ ★ ★

これはよく言われるほんの一つの例ですが、人間がそのお陰で生きていられるというのに、緑を無惨に枯らして、毎年地球上で日本の半分以上の面積を砂漠にしている、ということがあります。

さすがの国連の委員会もあきれたり、びっくりしたりしています。

植物が育つためになくてはならないVA菌根菌や窒素固定菌、硝化菌などを、科学肥料だ、除虫剤だ、何だかだといつて殺しておいて、それを近代的農業だと言ってみたり、又有害のガスをあちこちの工場から吐き出したり、何か一生懸命そんなことをやっています。

★ ★ ★

自動車のことは前にも書きましたし、今日ではもう余りにその罪科が広く問われていますから、ここで改めて申すまでもありませんが、それにしても朝の出勤時のあの街の混みようはどうでしょうか。

* 福井市照手 1-2-9

自分一人位は、みんなもやっていることだし、こんな時代だ、仕方ないじゃないか、等々の言いわけがある自動車を走らせています。ともあれ、余りに幼稚で、余りに他愛のないことではありませんか。

いくら言いわけをしてみても、窒素酸化物が大気中で雨水に溶けて硝酸イオンになる事実が消えていくものでもありません。ですからこゝへ例の「森の石松三十石船」の名文句——馬鹿は死ななきや直らない——というのが、ぴったりします。

★ ★ ★

琵琶湖の水のことや、瀬戸内海、東京湾の水のことはもう周知のことあります。

琵琶湖を浄化する可能の限度が殆んど絶望的に低いことや、湖底に蓄積された窒素やリンが富栄養化によって無酸素状態になった時に一気に溶ける危険のあることが言われていますが、その警告はすぐ消えていってしまうのです。

★ ★ ★

瀬戸内の酸性雨にしても、その周辺11県の20ヶ所によって調査されているデーターも公表されていますし、瀬戸内では一年中酸性雨が降り、それが工場の排煙や自動車の排ガスが原因であることもよく知られている事なのです。しかしそれも、知らされたと思うとすぐ消えていってしまうのです。

★ ★ ★

日本という細長くのびた列島の周辺の海や、全国に散在する湖沼の水質が調べられている事も、その結果がいろんな機関で報告されている事も事実あります。

ところがその結果に就いて、決してそれが徹底的に検討されずに、何時の間にか音もなく消えていくのです。消えていくような仕組みができているのです。

★ ★ ★

何故なのか、それは余りに分りきった理由からであります。

自らの利益が、そっと傷つかずに残されるように、痛いところへは触れないように、ふれさせないように、その手廻しがうまく出来ています。

そしてその結果、それらの汚濁の状態は、人の注目を避けたところで益々増大されていくのであります。

その結果は、も早とり返しのつかないものとなって、その自分達をも含めたすべての人々の上にやってくるのであります。

★ ★ ★

2、3年前の本誌にK・ローレンツの「人間の退化的発達、——つまり逆行的進化」論のことを書きましたが、そのローレンツが大変具体的に『紀元2000年をすこし過ぎると人間は、各自が酸素ボンベがないと敏速で活発な行動ができなくなるだろう』と言っています。

近頃、親が子を、子が親を、保険をかけて殺す事件がよく報道されます。どんなところから、こんな恐ろしいことが産れてくるのでしょうか。人間の歓念のこういう狂いが何によって作られているのでしょうか。

あめつち

ともあれその背後に大きく流れているものが、生態系に何らかの根元的な変化を与えていることは事実であります。

つまり人間を、根元的な危機に対して盲目なものに変質させているのであります。

★ ★ ★

これらの事を、ただ社会科学的に、経済学的に求めてみようとしても、それによって根元を把えることは不可能であります。

あめつちの悠久の流れの中に、漠とではあります、その光によって遙かにながめるのでなければ、それは見てこないのでしょうか。